

## エビデンスに基づく応用心理学的実践と科学者-実践家モデル

—教育・研究・実践の連携—

松見 淳子\*

### Evidence-based Applied Psychological Practice and the Scientist-Practitioner Model: Coordination of Education, Research, and Practice

Junko TANAKA-MATSUMI\*

In 2015 the national licensing law in psychology was enacted in Japan. Professional psychological activities will be closely monitored for accountability by the consumers of psychological services. The purpose of this article is to review the development and contribution of evidence-based practice in applied psychology with a special reference to clinical psychology. The goal of evidence-based practice in clinical psychology is the coordination and/or integration of scientific research and practice. Psychologists constantly ask ways of applying scientific research-based knowledge to practice settings and, in turn, generate further research questions out of practice settings. To guarantee sustainable educational training environment, the present article reviews historical background of the scientist-practitioner model of training and reaffirms the contemporary value of this long-lasting educational model.

**key words:** Evidence-based practice in psychology, clinical psychology, national licensing law in psychology, evidence-based medicine, psychotherapy, scientist-practitioner model

#### 問題と目的

本特集号企画の主旨は、これまでの『応用心理学研究』の実績を踏まえ、「エビデンスに基づく応用心理学的実践」を紹介し、臨床心理学を普及させる課題について展望することである。本稿ではエビデンスに基づく臨床心理学の由来を示し、応用心理学的実践の社会的貢献について検討する。応用心理学は広範に及ぶが、近年、エビデンスに関して注目を浴びている臨床心理学に焦点をおくこととする。エビデンスに基づく心理学的実践 (Evidence-based psychological practice: EBPP) は、研究と実践の統合を目指している (Kazdin, 2008)。研究から得られた科学の知をどのように実践の現場に活かせるか、また、

実践から得られた臨床の知をどのように新たな研究に活かせるか、といった問いかけを習慣化することが重要である。科学的なエビデンスと心理学的実践との関係性については多くの議論の積み重ねがある。本稿ではエビデンスに基づく応用心理学的実践の学問的基盤を確認し、エビデンスに基づく臨床心理学の主な成果、さらにEBPPを持続可能な専門活動として育てるための教育モデルについて検討する。具体的には、基礎と応用、研究と実践の連携と一体化を目指す科学者-実践家モデルの今日的意義を探る。

#### 資格制度と社会の関わり

本特集企画がタイムリーであることは、日本における最近の心理学的実践の流れを見れば明らかであ

\* 関西学院大学文学部総合心理科学科

Department of Integrated Psychological Science, Kwansai Gakuin University, Uegahara Ichibancho 1-155 Nishinomiya-City, 662-8501, Japan

E-mail: jmatsumi@gmail.com

る。2015年9月、日本で初めて公認心理師法が成立し、社会における心理学への期待が高まっている。この国家資格は2017年度から施行されるが、「保健医療、福祉、教育その他の分野において、心理学に関する専門的知識及び技術」により支援を要する者に対して援助を行うことを主な目的とする。資格取得の必須条件として心理学の基礎を修めることが含まれており、多くの大学で心理学教育カリキュラムの見直しが行われている。日本では1927年に心理学界最古の日本心理学会、続いて1931年に日本応用心理学会が創設された。時代を経て1999年に日本心理学諸学会連合が結成され、2015年7月1日現在で51団体が加盟している。日本の心理学の学問的基盤は長い年月を経て培われてきたといえよう (Imada & Tanaka-Matsumi, 2016)。

臨床心理学に関しては1896年Witmerがアメリカのペンシルバニア大学で世界初の心理クリニックを設立し、clinical psychology (臨床心理学) という用語を初めて用いた。以来120年の年月を経て日本で心理学の国家資格が成立したことは画期的なことである (Imada & Tanaka-Matsumi, 2016)。公認心理師の専門活動は応用心理学全般に及ぶ。日本で現在心理学的実践に関わる民間資格が約20程度あり、資格保持者の職場は、医療機関の精神神経科や心療内科、福祉施設での心理相談、企業のメンタルヘルス担当部署、家庭裁判所の調査官など幅広く、加えて2万校を超える小中学校にスクールカウンセラーが配置されている。2014年には労働安全衛生法の改正が行われ、メンタルヘルス不調の予防を目的として、医師、保健師などによる「ストレスチェック」の実施が事業者の義務となった。今後、公認心理師が労働者のストレスチェックに関わることは十分に予測できる。労働者のストレスが高い場合には、効果的な対応が必要であるが、この点に関しても研究開発の促進により、有効性の高い復職支援が期待される (川上, 2015)。

一方、国際社会に目を転じると、心理専門職の資格制度の整備されたアメリカやイギリスでは、1980年代から各種心理的障害の理論モデルの構築と効果的な介入方法の実証開発が精力的に行われ、エビデンスに基づく臨床心理学時代の幕開けとなった。1990年代に入ると心理療法の効果実証に関する系統的で大規模な調査研究が始まり、結果が世界中に

インターネット上で公表されるようになった。イギリスでは「心理療法へのアクセスを改善させるための政策」(Improving Access to Psychological Therapies: IAPT) が2007年から施行され、世界的な注目を浴びている。IAPTは不安と抑うつの問題などでQOLが低下している人に対して、介入効果が実証された認知行動療法を提供しようとする大規模な国家計画である。個人の健康と福祉を重視した実証的な経過報告が公表され、科学的な研究成果の社会的還元を目指している (Parry, Barkham, Brazier, Dent-Brown, Hardy, Kendrick, Rick, Chambers, Chan, Connell, Hutten, de Lusignan, Mukuria, Saxon, Bower, & Lovell, 2011)。

臨床心理学は、実践を伴う学問として位置づけられ、専門活動のアカウントビリティ (説明責任) を保証しなければならない (下山, 2010)。国家資格の実現により、心理専門職は今後、社会のモニターのもと、質の担保される実践活動が求められる。効果的な心理的介入を保証するためには信頼性と妥当性の高いアセスメントデータに基づき事例の見通しを立てるスキルが要求される。多職種協働の職場においては、心理学に関わる国家資格の制定が今後の教育・研究・実践に及ぼす影響は計り知れないほど大きいものと予測される。このように心理専門職が果たす役割は数多く、心理専門職の人材育成は今後の重要な課題である。心理専門職が多職種協働の職場で独自の職能を発揮するためには、どのようなエビデンスに基づく実践が必要となるだろうか。

### エビデンスに基づく心理学的実践 (Evidence-Based Practice in Psychology: EBPP)

国際的にEBPPが学会の方針として掲げられるようになったのは21世紀に入ってからである。2015年の時点で世界最大規模12万2500名余りの会員を擁するアメリカ心理学会は21世紀に入り、心理学的実践全般に亘り多様性の価値観に配慮したEBPPの理念と方針を公表している。

「心理学におけるエビデンスに基づく実践とは、支援対象者の特徴、文化、および価値志向の枠組みのなかで得ることができる最高度の研究と臨床専門知識を統合することである」(APA Presidential Task Force on Evidence Based Practice, 2006)。エビデンスに関わる心理学的実践には、アセスメント、ケース

フォーミュレーション、治療的關係、および介入が含まれる。最高度の研究のエビデンスとは、「介入方策、アセスメント、臨床問題、研究場面と日常場面双方における介入対象者に関する科学的な結果、さらに心理学および関連領域で臨床的に関連のある基礎研究の科学的な結果を指す」(APA Presidential Task Force on Evidence Based Practice, 2006)。この定義ではエビデンスに関わる心理学的実践は広域に亘り、心理学の専門活動すべての面において研究成果が存在するかどうかを問う構えが奨励される。

### エビデンス

「エビデンス」とはもともと証拠あるいは根拠という意味であるが、心理療法を例にとれば、アセスメントに基づいて介入を行った結果、治療目的を達成できたかどうかを判断するために示される。アメリカ心理学会第12部会(Society of Clinical Psychology)では臨床心理学者David Barlowの指揮下、心理学的治療におけるEmpirically Supported Treatments(ESTs: 経験的に支持された治療)の効果を調査するタスクフォースを構成し、結果を公開している(Chambless & Ollendick, 2001; Division 12 Task Force on Promotion and Dissemination of Psychological Procedures, 1995, 1998)。また、アメリカ心理学会第53部会(臨床児童青年心理学部会: Society of Clinical Child and Adolescent Psychology, SCCAP)は、2008年に子どもの心理療法の有効性に関する調査結果を機関誌Journal of Clinical Child & Adolescent Psychologyに掲載している。さらに2015年にはレビューのアップデートを行い、障害別に最高度のエビデンスを伴う介入法を解説した。

例えば、Smith & Iadarola (2015)は5歳までの幼児を対象としたASD(Autistic Spectrum Disorder: 自閉スペクトラム症)の包括的介入プログラムのエビデンスをレビューしている。エビデンスの基準として、①介入のマニュアルが作成されていること、②効果研究に群間実験デザインまたは準実験デザインを用いていること、および③一事例実験デザインを用いた研究の系統的なレビューが存在することを強調している。

EBPPを促進させるために治療技法の明解な記述と具体的な手順を明記したセラピストの手引書が開発されている。日本でも抑うつ、不安障害、パニック障害、強迫性障害、対人恐怖症、発達障害などさ

まざまな問題の改善に向けて技法介入の効果検証が行われている。

### エビデンスに基づく医療とコクラン共同計画

EBPPは単独で発生したわけではなく、エビデンスに基づく医療(Evidence-based medicine: EBM)の台頭と関係している。EBMの目的は、治療上の疑問や問題を明確化し、エビデンスに基づいた医療を推進することである(Sackett, Rosenberg, Gray, Haynes, & Richardson, 1996)。臨床判断の基準をエビデンスの質に求め、さらに個々の患者の価値観を考慮に入れた治療を目指している。EBMは、1992年にカナダの臨床疫学者であるGuyattをリーダーとするEBMワーキンググループによって提唱された(Evidence-Based Medicine Working Group, 1992)。先述のアメリカ心理学会が掲げるEBPPの考え方もEBMに由来する。

EBMのデータベースで有名なのはイギリスの疫学者Cochraneが創始したコクラン共同計画である。コクラン共同計画はイギリスで1992年からスタートした。日本でのコクランのネットワークは1994年に設立された(津谷, 2000)。コクラン共同計画では、疾患別に系統的な文献調査(systematic review)を行い、結果を「コクラン・ライブラリー」としてインターネットで公表している。疾患にはうつ病など精神疾患も含まれる。システマティック・レビューには7つのステップが設けられている。①研究テーマの設定、②研究結果の収集、③各研究の妥当性の評価、④要約、⑤メタ分析による統計学的解析、⑥結果の解釈、⑦編集と定期的更新が含まれる(津谷, 2000, p. 318)。

コクラン共同計画の方針とEBMは密接な関係にある。EBMの実践は、主観的判断や推測ではなく、臨床研究の結果を実際の意思決定に用いる方法であり、一人ひとりの患者が最良の治療を受けられるようにすることである(原野, 2003; Institute of Medicine, 2001)。EBMによると、臨床家は、①臨床課題について質問を組み立てるスキル、②最高のエビデンスを検索する能力、③結果の妥当性を確認するために必要な研究方法を批判的に検証評価する能力、④臨床の現場に知識を応用する能力、および⑤臨床実践の評価とそれに基づく研究能力の習得が求められる。さらに重要な点は、5つの新しい「スキル」と並行して、すべての意思決定に価値判断が伴うこ

とである。EBMは質の高い情報を得るための能力や技法の習得だけではなく、医療専門職の自己練達を促すような高い教育理念を掲げている。

EBMの5段階プロセスはEBPPにも当てはまる。また、EBMはメタ分析により得られる効果値だけではなく、専門家がどのようにその情報を活用し、個々の患者の状態と照らし合わせ、さらにエビデンスを検索できるかといった研究者としての基本的姿勢にも関係する。EBMにおけるうつ病・不安障害などの国際的な治療ガイドラインでは認知行動療法が第一選択となっている。日本でも2010年4月からうつ病の治療に対して認知行動療法の保険点数化が開始されたことにより、エビデンスに基づく心理学的実践を行える専門家の養成が急務である。

#### 心理療法のエビデンスとその多様なアプローチ

心理療法の効果については、エビデンスの着目点が一つではなく、複数ある。その証拠に技法の効果と関係性の効果とどちらがより有効かといった二者択一的な論争が絶えない(Lambert, 2011; Laska, Gorman, & Wampold, 2014)。技法の要因と一般的要因(関係性など)のどちらを重視するかによって効果研究の理論的な基盤と研究計画の組み立て方も異なる。アメリカ心理学会を中心に初期の調査研究の対象となった「実証に基づく治療(Empirically-validated treatments)」のエビデンスは技法を重視しており、定義が限定的であるため、応用範囲が限られている。このことから、エビデンスの水準を設け、心理療法をより広く捉え「経験に基づく治療(empirically supported treatments)」を対象にした調査が行われるようになった。

実証に基づく治療の大半は、認知行動療法の技法である。しかしながら、もともと心理療法は実験的統制条件下で施行されるものではなく、むしろ複雑な社会文化的文脈の中で人と人との交流により成り立つ極めて人間的な営みである(Draguns, 2013; Wampold, 2001)。よって、エビデンスの範囲を広げることにより「経験に基づく心理療法」の有効性が検討されるようになった。経験に基づく治療は、技法を磨き、研究を重ねることでエビデンスの水準がより高くなる可能性がある。実際、認知行動療法も含め、多文化・多様性時代を反映し、特定の文化で生まれたエビデンスに基づく心理療法が異なった文化に適合するかどうかを検討する研究が増えてき

ている(Draguns, 2013; Masuda, 2016; Tanaka-Matsumi, 2011, 2016)。

以上、多様なエビデンスに基づく心理学的実践において、EBMと同様に専門活動に対する理念を明らかにすることが求められる。理念とは教育、研究、実践において統一された理念を指す。EBPPを支える教育理念とはどのような価値観を反映する理念であろうか。次に臨床心理学の代表的な大学院教育モデルである科学者-実践家モデルについて述べる。研究が実践の活性化をもたらす、専門活動に貢献するという視点を重視する。

#### 科学者-実践家モデル (Scientist-Practitioner Model)

エビデンスに基づく臨床心理学は、科学者-実践家の訓練モデルに支えられている。エビデンスを蓄積するために、臨床実践と研究の連携が必要である。臨床心理専門家は、心理学者として研究を行い、さらに、実践家として臨床現場で効果的な専門活動を行う能力を大学院で養う。臨床場面で確かな意思決定を行うために研究と実践の橋渡しを行う。

心理学では、帰納法と演繹法の二通りの判断方法を学ぶが、心理学的実践には両方の推論が必要である。帰納法は個別の事例の詳細なアセスメントを行うことによって事例の共通点を導き出すことに関係があり、演繹法は一般的法則を個別の事例に適用することに関係する。具体例を挙げると、うつ病の認知療法を開発したBeck(1967)は、臨床場面でうつ病と診断された患者さんに共通した悲観的で否定的な内容の話を聞いていねいに聞きとった問診データより「自動思考の三要素」の法則を打ち出した。三要素とは、自己、周囲、および将来に対して現実的ではなく否定的な見方をする思考を指す。自動思考のアセスメントデータは認知療法の開発に貢献している(ベック・ラッシュ・ショウ・エメリー, 2007)。精緻な治療手引書に基づき、うつ病に対する認知療法の効果研究が行われるようになった。

このように観察、記述、推論、仮説検証、理論構築の過程を訓練する総括的なモデルが科学者-実践家モデルである。科学者-実践家モデルはボールダーモデルともいわれ1949年にアメリカで誕生し、今日まで特にアメリカの大学院教育において中心的な役割を果たしてきた(Baker & Benjamin, 2000; 今



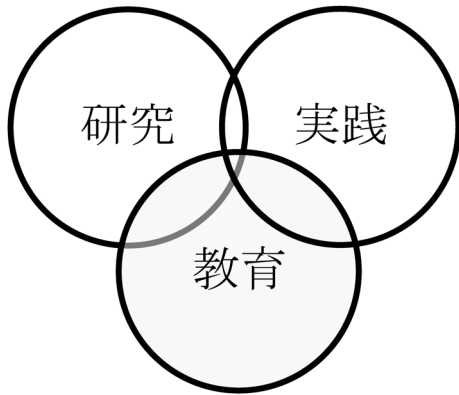


Figure 1 科学者-実践家モデル

田, 1996; 松見, 2001, 2005)。

歴史的に科学者-実践家モデルは、第2次世界大戦の終了とともに、帰国したアメリカ人兵士の精神衛生問題に対処できる臨床心理学者の養成が急務になったことに由来する。全米から指導者71人がコロラド州のボールダーに集まり、2週間に亘り臨床心理学専門家養成について集中討議した結果、臨床心理学者の「科学者-実践家モデル」(scientist-practitioner model)が生まれた。モデルの三要素は、教育、研究、および実践であり、臨床心理学者は3つの役割をこなすためのトレーニングを受ける (Figure 1)。

現在、科学者-実践家モデルは、アメリカの大学院教育をはじめ多くの国で採用されている。日本では、1995年、日本学術会議心理学連絡委員会主催シンポジウムにおいて、基礎心理学の立場からボールダーモデルが紹介され、『心理学評論』に特集号が編まれた (今田, 1996)。日本で科学者-実践家モデルに基づく臨床心理学の大学院教育を行っているプログラムが増加していることは、最近の各大学院プログラムのホームページにも明らかである。筆者が所属する大学院でも科学者-実践家モデルに基づき、基礎心理学と応用心理学の連携を図り、教育、研究、および実践の一体化を目指している。最近、大学テキストに『臨床心理学 Clinical Psychology: Evidence Based Approach』(丹野・石垣・毛利・佐々木・杉山, 2015)あるいは『臨床児童心理学 実証に基づく子ども支援のあり方』(石川・佐藤, 2015)など、エビデンスに注目したタイトルが見られるようになり、科学者-実践家モデルが日本で普及してきたことが窺える。

## 今後の課題

科学者-実践家モデルが誕生して70年近くになる現在、科学技術、情報技術の飛躍的な発展と社会文化的変遷の下、臨床心理学に要請される役割にも変化が見られる。心理専門職は、生物-心理-社会モデルに基づき多角的に人間の営みに対する専門的な見立てを行えるように有効な訓練を受けて多職種連携の職場に進出している。

科学者-実践家モデルは今日も高い評価を受けている (McFall, 2006)。エビデンスに基づく臨床心理学の顕著な成果のうち、心理療法の効果研究は今日さらに活発化している。しかしながら、科学の知がどの程度臨床の現場に浸透しているかという疑問の声も聞こえる。両者の連携は簡単ではないが、実習やインターンシップ先からエビデンスに基づく実践研修を要請する職場もある。今後、公認心理師の働きに期待するところが大きい。

さらに、心理療法の結果のみならず、変化のプロセスについての研究が求められる。どのような過程を経て心理療法は対象者に変化をもたらすのか、心理療法のプロセスについての実証研究は少ないことが指摘され、系統的な事例の検討方法に焦点を当てた研究が期待される (Iwakabe, 2013)。日常の臨床現場での気づきが新たな発見となり、研究が生まれる。現場発信型の研究方法の開発も必要である。

最後に臨床心理学の大学院教育を歴史的に展望した McFall (2006) が導き出した知見の一つ挙げておきたい。それは、臨床心理学が実践的学問として固有の価値を持ち続けるためには、研究者を養成し、実証科学的な研究を優先することが不可欠とする結論である。臨床心理学研究の価値はすでに証明されているが、今後基礎研究と臨床実践の連携に着眼した研究開発のニーズが高まることが予測される。

## 結 論

日本で国家資格化された心理学がエビデンスに基づく実践を発展させていくための課題は、専門家養成プログラムの強化にあるように思われる。科学者-実践家モデルに基づき日本でも大学院生を教育している例が増えている。専門職の説明責任を保証するためにはエビデンスが必要である。心理専門職への期待と社会のニーズが高まる中、心理学の国家

資格とエビデンスに基づく大学院教育プログラムが連動して機能することが必要となるだろう。

### 引用文献

- American Psychological Association Presidential Task Force on Evidence-Based Practice 2006 Evidence-based practice in psychology. *American Psychologist*, **61**, 271-285.
- Baker, D. B., & Benjamin, L. T. 2000 The affirmation of the scientist-practitioner: A look back at Boulder. *American Psychologist*, **55**, 241-247.
- Beck, A. T. 1967 *Depression: Clinical, Experimental, and Theoretical Aspects*. New York: Hoeber Medical Division, Harper & Row.
- ベック, A. T.・ラッシュ, A. J.・ショウ, B. F.・エメリー, G. (共著), 坂野雄二 (監訳) 神村栄一・清水里美・前田基成 (共訳) 2007 うつ病の認知療法新版 岩崎学術出版社. (Beck, A. T., Rush, A. J., & Shaw, B. F., & Emery, G. 1979 *Cognitive Therapy of Depression*. New York: Guilford Press.)
- Chambless, D. L., & Ollendick, T. H. 2001 Empirically supported psychological interventions: Controversies and evidence. *Annual Review of Psychology*, **52**, 685-716.
- Division 12 Task Force on Promotion and Dissemination of Psychological Procedures 1995 Training in and dissemination of empirically validated psychological treatments: Report and recommendations. *The Clinical Psychologist*, **48**, 3-23.
- Division 12 Task Force 1998 Update on empirically validated therapies: II. *The Clinical Psychologist*, **51**, 3-16.
- Draguns, J. D. 2013 Cross-cultural and international extensions of evidence-based psychotherapy: Toward more effective and sensitive psychological services everywhere. *Psychologia*, **56**, 74-88.
- Evidence-Based Medicine Working Group 1992 Evidence-based medicine. A new approach to teaching the practice of medicine. *JAMA*, **268**(17), 2420-2425.
- 原野 悟 2003 EBM がわかる疫学と臨床判断 新興医学出版社.
- 今田 寛 1996 心理学専門家の養成について—基礎心理学の立場から— 心理学評論, **39**, 5-20.
- Imada, H., & Tanaka-Matsumi, J. 2016 Psychology in Japan. *International Journal of Psychology*, **51**, 220-231.
- Institute of Medicine 2001 *Crossing the quality chasm: A new health system for the 21st century*. Washington, DC
- 石川信一・佐藤正二 (編著) 2015 臨床児童心理学 実証に基づく子ども支援のあり方 ミネルヴァ書房.
- Iwakabe, S. 2013 Competing models of evidence and corroborating research strategies: Shaping the landscape of psychotherapy research in the era of evidence-based practice. *Psychologia*, **56**, 89-1112.
- 川上憲人 2015 職場ストレスとメンタルヘルス 臨床心理学, **15**(1), 302-307.
- Kazdin, A. E. 2008 Evidence-based treatment and practice: New opportunities to bridge clinical research and practice, enhance the knowledge base, and improve patient care. *American Psychologist*, **65**, 110-136.
- Lambert, M. J. 2011 Psychotherapy research and its achievements. In Norcross, J. C., VandenBos, G. R., & Freedom, D. K. (Eds.), *History of Psychotherapy: Continuity and Change* (2nd ed.), Washington, DC, US: American Psychological Association, pp. 299-332.
- Laska, K. M., Gurman, A. S., & Wampold, B. 2014 Expanding the lens of evidence-based practice in psychotherapy: A common factors perspective. *Psychotherapy*, **51**, 467-481.
- Masuda, A. 2016 Principle-based cultural adaptation of cognitive behavioral therapies: A functional and contextual perspective as an example. 行動療法研究, **42**, 11-19.
- 松見淳子 2001 米国における臨床心理学 Scientist-Practitioner Model 50 周年 行動科学研究, **40**(2), 1-8.
- 松見淳子 2005 科学者-実践家モデルと心理学—連携が生み出す臨床心理学の視点— 下山晴彦 (編) 心理学の新しいかたち 誠信書房 pp. 47-65.
- Parry, G., Barkham, M., Brazier, J., Dent-Brown, K., Hardy, G., Kendrick, T., Rick, J., Chambers, E., Chan, T., Connell, J., Hutten, R., de Lusignan, S., Mukuria, C., Saxon, D., Bower, P., & Lovell, K. 2011 *An evaluation of a new service model: Improving Access to Psychological Therapies demonstration sites 2006-2009. Final report*. NIHR Service Delivery and Organisation programme.
- McFall, R. M. 2006 Doctoral training in clinical psychology. *Annual Review of Clinical Psychology*, **2**, 21-49.
- 下山晴彦 2010 これからの臨床心理学 東京大学出版会.
- Sackett, D. L., Rosenberg, W. M., Gray, J. A., Haynes, R. B., & Richardson, W. S. 1996 Evidence-based medicine: What it is and what it isn't. *British Medical Journal*, **312**, 71-72.
- Smith, T., & Iadarola, S. 2015 Evidence base update for autism spectrum disorder. *Journal of Clinical Child & Adolescent Psychology*, **44**, 897-922.
- Tanaka-Matsumi, J. 2011 Culture and psychotherapy: Searching for an empirically supported relationship. In K. D. Keith (Ed.), *Cross-Cultural Psychology: Contemporary Themes and Perspectives*. Chichester, U.K.: Wiley-Blackwell, pp. 274-292.
- Tanaka-Matsumi, J. 2016 Cross-cultural perspectives on the application of cognitive behavior therapy (CBT) in Asia: Introduction. 行動療法研究, **42**, 5-10.
- 丹野義彦・石垣琢磨・毛利伊吹・佐々木 淳・杉山明

子 2015 臨床心理学 *Clinical Psychology: Evidence-based approach* 有斐閣.  
津谷喜一郎 2000 コクラン共同計画とシステマティック・レビュー—EBM における位置づけ— 公衆衛生研究, **49**, 313-319.

Wampold, B. E. 2001 *The Great Psychotherapy Debate: Models, Methods, and Findings*. L Hillsdale, NJ: L. Earlbaum Associates.

(受稿：2015.6.22; 受理：2016.2.29)

---